

「徳川家康 ～歴史に学んだ平和主義者」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 若き日の家康が味わった苦難の日々

神話の時代を含めれば、2670年以上もの間ずっと同じ血統を保っておられるという、世界でも例のない稀有(けう)な存在である皇室をいただく国家である我が国ですが、皇室の下では、歴史上に何度も政権交代が行われてきました。

すなわち、数多くの人物が政治の実権を握っては、その子孫によって滅んでいくということが繰り返されてきたほか、政権が移りゆく過程では、必ずといっていいほど世の中が乱れ、多くの人々が生命の危機にさらされながら、不安な日々を過ごさなければならなかったのです。

しかし、17世紀に入って、ある人物が政治の実権を握った後は世の中が安定し、その人物の子孫による政府が約260年にわたって存続しました。

その人物とはもちろん徳川家康(とくがわいえやす)のことであり、子孫による政府とは江戸幕府のことです。実は、江戸時代の中に我が国の人口は約3倍、耕地面積は約2倍に増えており、家康の政策によって、人々が平和で安全に生活していたことを間接的に証明しています。

これらのことから考えれば、家康によって我が国に平和がもたらされたのは間違いないといえますが、私たちは徳川家康という人物に対して、決して良い印象を持っていないことが多いようです。

その大きな理由としては、豊臣秀吉(とよとみひでよし)から政治の実権を無理やり奪ったことなどによって、家康には「狸爺(たぬきじい)」という悪い意味でのあだ名がついていますし、特に私の住む大阪では、「太閤さん(=秀吉)の子孫を滅ぼしたとんでもない男」というイメージが完全に定着しております。

しかし、江戸幕府という長年続いた組織をつくった家康の功績自体は、個人の感情は別にして高く評価すべきですし、たとえ幕府設立の目的が「豊臣家を滅ぼして、徳川家のために安定した政権をつくる」ことであったとしても、その結果として国民が平和を享受できたのはまぎれもない事実なのです。

また、家康には大変な勉強家という側面があり、それゆえに「歴史に学んだ」と思われる実績も数多く残しています。歴史には成功した事例だけとは限らず、失敗も数多くありますが、家康は歴史における成功あるいは失敗例から、徳川家の安泰を保つにはどうすればよいのかということを知り、

江戸幕府を創設する際の参考にしています。

では家康は歴史からどのようなことを学んで、我が国に平和をもたらしたのでしょうか。今回の講座では、家康による我が国の平和の実現の過程について探っていくとともに、家康に対して私たちが抱いている、誤解や偏見などについても紹介できればと思っております。

徳川家康は、1542年に三河(現在の愛知県東部)の大名である松平広忠(まつだいらひろただ)の嫡男(ちやくなん)として生まれましたが、当時の松平家は岡崎城(おかざきじょう)の主ではあったものの、西からは織田家(おだけ)、東からは今川家(いまがわけ)の圧迫を受けていました。

進退窮(きわ)まった広忠は、生まれたばかりの竹千代(たけちよ、家康の幼名)を今川家の人質として送ろうとしましたが、その途中で竹千代を織田家に奪われてしまい、織田家への服従を迫られました。

広忠がこれを拒否したことで、竹千代は殺されかけたのですが、織田家の当主である織田信秀(おだのぶひで)の判断により、竹千代は織田家の人質として暮らすようになりました。なお、この頃に、竹千代は信秀の嫡男である若き日の織田信長(おだのぶなが)に出会っていた可能性が高い、とされています。

その後、今川家が信秀の子を生け捕ったことで、人質交換のかたちによって、竹千代は今川家の人質として生活するようになったのですが、この頃までに広忠が若くして亡くなっていたため、竹千代や松平家、あるいは家臣らにとって地獄の日々が始まろうとしていました。

竹千代は、自身の本拠地である岡崎城には入れず、今川家の本拠である駿府(現在の静岡)で暮らしましたが、これは松平家の嫡男を生かしておく代わりに、領地である三河が今川家によって完全に支配されることを意味していました。三河は今川家の「植民地」と化してしまっただけです。

すなわち、岡崎城が今川家の代官の支配となったことで、三河での年貢がそのまま本国の駿府へ送られてしまい、松平家の家臣たち、いわゆる三河衆の生活が困難をきわめた一方で、今川家が他国と戦争をする場合は、三河衆は一番危険な最前線に置かれ、多くの家臣が命を落としました。

いわば「今川家の奴隷」のような状態となった三河衆は、自分たちの置かれた環境を呪いましたが、主君である竹千代が今川家に人質にとられている以上はどうしようもありませんでした。

実は、この状態こそが、松平家が今川家に「全面降伏」した姿なのです。我が国には「もし他国に侵略されれば、憲法9条にも書いてあるように、日本は戦ってはいけないのだからあっさり降伏すればよい。そうすることで、血を流さずに平和を保つことができる」という思想がありますが、日本を松平家に、他国を今川家に置き換えれば、我が国の運命がどうなるかがよく分かるのではないのでしょうか。

これも「歴史に学ぶ」ことのひとつなのです。

さて、当主の竹千代が人質となっただけでなく、家臣の三河衆が地獄のような生活を送らざるを得ないという散々な目にあった松平家でしたが、この頃の経験は決して無駄にはなりませんでした。

「竹千代様がおられる限り、松平家はきっと復興できる」。そう信じた三河衆は、食うや食わずの生活を耐え忍び、また戦(いくさ)の最前線に送られても、生き延びるために懸命に戦いました。

こうした境遇が、やがて三河兵を最強の軍団へと成長させたのです。その強さは、後に「三河兵 1 人は尾張(現在の愛知県西部)兵の 3 人に匹敵(ひってき)する」といわれたほどでした。

一方、今川家の人質となったことで、周囲から陰湿なイジメを受けながらも、じっと辛抱を続けた竹千代にとっても、人質の暮らしは悪いことばかりではありませんでした。

竹千代が身を寄せていた当時の駿府は、戦乱を逃れた公家たちが集まったこともあって、さながら「東の都」と呼ばれるような発展を見せていました。

幼少期をそんな都市で過ごしたことで、三河で暮らしていれば絶対に身に着けられなかったと思われる高い教養を、竹千代は自分のものにすることができたのです。

家康の愛読書に、鎌倉幕府の誕生やその後を記した歴史書である「吾妻鏡(あずまかがみ)」がありますが、これらの教養が、江戸幕府の成立に深くかかわっていくこととなります。

また、竹千代は周囲からのイジメを耐え抜く中で、いつかは松平家を復興してみせるという芯の強さを持つ一方で、そのためには何があっても我慢するという忍耐強さや、周囲との協調を目指したことによる腰の低さも同時に身に着けました。

やがて家康は、その義理堅さや実直さから「律義者(りちぎもの)」として信頼される武将となり、後年の天下取りに役立つことになったのです。

さて、成長した竹千代は、元服して松平元信(もとのぶ)から元康(もとやす)と名乗りましたが、立場としては人質のままであり、1560年に、今川家の当主である今川義元(いまがわよしもと)が織田信長を討伐する兵を挙げた際にも、今までと同様に最前線で織田家と戦っていましたが、ここでとんでもないことが起きます。

信長が桶狭間(おけはざま)で休息中の義元を急襲して、その首を落とすことに成功したのです。世にいう「桶狭間の戦い」によって、元康の運命は大きく変わることになりました。

元康は、戦後の混乱で無主となっていた岡崎城に入ると、その後の今川家とのいさかいを切り抜けて、三河一国の大名となったのです。この間に信長と同盟を結ぶことにも成功し、自分の姓名も「徳川家康」と改めました。

新たな姓名のうち、名については「元康」の「元」が今川義元からもらったものだったのでこれを

捨てたのですが、「徳川」への改姓の理由は後に紹介します。

三河一国を支配し、また信長と結んだことで大名として大きく成長した家康でしたが、その後の人生にはまだまだ数多くの苦難が待ち受けていました。

2. 長い辛抱の日々が報われるとき

1572年、甲斐(現在の山梨県)の大名である武田信玄(たけだしんげん)が上洛を決意し、家康の領地であった遠江(現在の静岡県西部)を通過しました。自分の領地を素通りされるのを黙って見ていられなかった家康は、信玄に戦いを挑みましたが、見事なまでに返り討ちにあってしまいました。いわゆる「三方ヶ原(みかたがはら)の戦い」のことです。

なお、戦(いくさ)に敗れ、浜松城に逃げ帰った家康は、恐怖のあまり馬上で粗相(そそう)をしたと伝えられています。

何とか生きて浜松城へ戻る事ができた家康は、惨めな自分の姿を絵師に描かせました。この時の肖像画は現在も残っており、俗に「しかみの像」と呼ばれています。

家康は、この絵を残すことで自分の行為を反省するとともに、同じような過ちを二度としないと固く誓ったと伝えられています。こんなところにも、家康の「歴史に学ぶ」姿勢がうかがえますね。

ところで、家康と信長との同盟は、裏切りが当たり前の戦国の世において、信長が死ぬまでずっと続いたという極めて珍しいものでしたが、そんな同盟にも危機のときがありました。

1579年、家康の正室であった築山殿(つきやまどの)と嫡男の徳川信康(とくがわのぶやす)が、武田家に内通しているのではないかと問題になり、信長は家康に両者を殺害するように命じたのです。

家康にとって、正室はもちろんのこと、後継ぎとして期待をかけていた信康を失うことは大変な問題でした。しかし、天下を統一しようかという信長と、家康自身との力量に格段の開きがある現状では、同盟を破って信長と戦うという選択肢は存在しません。結局、家康は泣く泣く信康に切腹を命じて、築山殿を殺害しました。徳川家の繁栄や、ひいては家臣や領民の平和を守るために、非情の決断を下さざるを得なかったのです。

このエピソードは、「平和を保つ」と単に口にするのは容易なもの、それを実現するためには、身を斬られる思いをしなければならぬほどの厳しい決断を迫られることがある、ということをお私たちに教えてくれる貴重なエピソードでもありますね。

その後、1582年に起きた本能寺の変で、信長は明智光秀(あけちみつひで)に殺害されましたが、このとき、家康はわずかな家臣とともに堺にいました。落ち武者狩りで生命が奪われかねない危機でしたが、家康は伊賀(現在の三重県)の山々を強引に越えて、何とか難を逃れました。

三河に戻った家康は、謀反(むほん)を起こした光秀を討ち、天下取りに名乗りを挙げようとしたが、既に秀吉によって光秀が討たれた後でした。秀吉による常識はずれのスピードに、さしもの家康も勝てなかったのです。それでも、家康は来るべき秀吉との戦いに備え、信長の死後の混乱に乗じて甲斐などを治め、領土を拡大しました。

1584年、信長の二男である織田信雄(おだのぶかつ)からの誘いで、家康は秀吉と戦うことを決意し、小牧(こまき)・長久手(ながくて)の戦いで秀吉を破りました。しかしその後、信雄が勝手に秀吉と和睦(わぼく)してしまったために、家康も秀吉と和睦せざるを得ませんでした。

その後の秀吉は、家康に自身への臣従を迫るとともに、自分の妹を家康の新たな正室として差し出したり、母を人質として送ったりしました。こうした秀吉の容赦のない攻勢に対して、家康もついに臣従を決意し、秀吉に面会して臣下の礼をとりました。

そして、1590年に秀吉が天下を統一すると、家康は滅亡した北条氏(ほうじょうし)の旧領である関東の諸国を秀吉から与えられました。

しかし、それは石高(いそだか)こそ約100万石の大幅な増加であったものの、先祖伝来の地でもあり、血のにじむような思いで獲得してきた三河などの領地を、秀吉に没収されることを意味していましたが、家康はここでも屈辱に耐え、秀吉の命令に従ったのです。

「やがて巡り来るであろう機会を待って、その日までじっと耐え続ける」。人質時代に培(つちか)った家康の苦労や辛抱が報われる日が、ついにやって来ました。

1598年に、秀吉が幼い秀頼(ひでより)を遺してこの世を去ったのです。秀吉から秀頼と豊臣家の行く末を託され、笑顔で応えた家康は、内心でこう思っていました。

「太閤殿、貴殿が織田家に対してそうなさったように、今度は自分が豊臣家を出し抜いて天下を取る番ですな」。

秀吉の死後、秀頼の後見人としての地位を利用しての専横(せんこう)ぶりが目立ち始めた家康は、秀吉の家臣たちの対立を利用して、豊臣家の恩顧(おんこ)の大名の一部を自分の味方(あそばさ)にすることに成功しました。

そして、1600年に関ヶ原(せきがはら)の戦いで豊臣家家臣の石田三成(いしだみつなり)を破ると、1603年には朝廷から征夷(せいぎ)大將軍に任じられて江戸幕府を開き、天下取りに本腰(ほんこし)を入れ始めましたが、当時はまだまだ豊臣家に従う大名が多かったので、家康は以後もじっくりと時間をかけて、徳川家の天下へと導くこととなります。

関ヶ原から10年以上が経過して、豊臣家恩顧(おんこ)の大名が次々と死亡する一方で、秀頼が成人して将来の徳川家に悪い影響をもたらすと判断した家康は、それまでの律義者(りぎしや)の仮面(かめん)を脱ぎ捨てて、なりふり構わぬ姿勢(しせい)で豊臣家を追いつめました。

1614 年、秀頼は家康の勧めで秀吉ゆかりの京都の方広寺(ほうこうじ)を再建し、新たに梵鐘(ぼんしょう)をつくったのですが、その銘文に記載された文字が、その後の豊臣家の運命を暗転させることになりました。

梵鐘の銘文には「君臣豊楽(くんしんほうらく)」「国家安康(こっかあんこう)」の文字が刻まれていましたが、これは「君主も家臣も豊かでありますように」「国家がいつまでも安泰でありますように」という意味であり、取り立てて問題視するようなものではありません。

ところが、家康は「『君臣豊楽』と書いて豊臣家の繁栄を願う一方で、『国家安康』と書くことで家康の名を二つに割って呪いをかけている」と言い出して、豊臣家を非難したのです。

常識的に考えてそんな解釈はあり得ず、家康による言いがかりでしかなかったのですが、当時の学者などが次々と家康の説を支持したことによって、話が大きくなってしまいました。

豊臣家は、弁明の使者として家臣の片桐且元(かたぎりかつもと)を家康のもとへ送りましたが、家康が自分の激怒を理由に且元に会おうとしなかったため、且元は、そのまま当時家康が所在していた駿府に留め置かれました。

且元がいつまで経っても帰ってこないのを不審に思った豊臣家が別の使者を送ると、家康はすぐに面会して「豊臣家と対立する意思はない」と伝えて使者を返した後に、且元には、家臣を通じて自身の怒りを伝えたくて「豊臣家が徳川家に逆らう意思がないのであれば誠意を示せ」と脅迫(きょうはく)したのです。

この結果、豊臣家は先に帰ってきた使者と且元とで、全く違う家康の考えを聞いたことになりました。疑心暗鬼におちいった豊臣家は、且元を追放するなど混乱してしまい、それを好機と見た家康は、豊臣家に宣戦布告しました。世にいう「大坂冬の陣」の始まりです。

徳川家の襲来に備えて、豊臣家では浪人を金でかき集めて軍備を整えました。徳川家は激しく攻め立てましたが、さすがに天下の名城とうたわれた大坂城はそう簡単に落ちません。業を煮やした家康は、豊臣家の戦意を喪失させる目的で、城めがけて昼夜関係なく大砲を撃ち続けました。

この作戦が功を奏して、家康は大坂城の外堀を埋めるという、徳川家にとって有利な条件で講和に持ち込むことに成功すると、その工事の際にどさくさにまぎれて内堀まで埋めてしまいました。いかに巨大な大坂城といえども、堀がなくては裸も同然です。

翌 1615 年 5 月、再び徳川家に攻められた大坂城は、豊臣方の各兵の奮戦もむなしく落城し、秀頼と母親の淀殿(よどの)が自害しました。世にいう「大坂夏の陣」です。この戦いの後、秀頼の子で 8 歳になる男子も捕えられて首をはねられ、豊臣家は完全に滅亡しました。

豊臣家を滅ぼすために手段を選ばず、またわずか 8 歳の子であっても容赦なく首をはねたことで、家康に対する悪いイメージは完全に定着してしまったのですが、家康には家康なりの筋の通った考

えがありました。なぜなら、これらの手法は、勉強家の家康が「歴史に学んだ」結果でもあったからです。

3. 「歴史に学んだ」家康による徹底した政策

家康の天下取りより約450年前の1159年、平治の乱によってライバルの源義朝(みなものよしとも)を倒した平清盛(たいらのきよもり)は、返す刀で義朝の息子でまだ少年だった頼朝(よりとも)や、赤ん坊だった義経(よしつね)を捕らえ、自分の前に引き出しました。

ここで二人をあっさりと殺すこともできたのですが、継母(まはは)による懇願や、義経の母親の色香(いろか)に負けた清盛は結局二人を生かしてしまい、それから約25年後に、成長した頼朝や義経らによって、清盛亡き後の平家は滅亡してしまいました。

自分に刃向ったり、あるいは自分が滅ぼそうとしたりした勢力の残党を生かしておいては、いつ自分が平家の二の舞を演じてしまうか分かりません。そんな厳しい現実を歴史から学んだ家康だったからこそ、自分の生命があるうちに大坂城を落として、幼い子供の首すらはねることで、豊臣家を完全に叩きつぶす必要があると判断したのです。

こうした家康の「歴史に学んだ姿勢」が、実は幕府の組織のあちらこちらに見受けられるのを皆さんはご存知でしょうか。

鎌倉幕府が滅亡した後、建武の新政を経て、足利尊氏(あしかがたかうじ)が征夷大將軍となって室町幕府が誕生したのですが、この政権には致命的な欠陥がありました。

初めての本格的な武家政権を誕生させた源氏や北条氏と違い、足利氏はカリスマ性や実力面で劣るところがあったことや、足利氏と同じだけの勢力をもつ守護大名が数多く存在し、彼らが幕府の言うことをなかなか聞かなかったことで、幕府の指導力が設立当初から疑問視されていました。

守護大名の多くは足利氏に匹敵する広大な領地を持っていたのと同時に、管領などの幕府の重要な役職を歴任していました。いわば財力と権力とを同時に持っていたがゆえに、幕府の命令を無視するようになっていったのです。

そんな守護大名らに対抗すべく、6代将軍の足利義教(あしかがよしのり)が独裁的な政治を行なったのですが、最期には暗殺されるという悲劇をもたらし、その後遺症は後の幕政に深刻な影響を与えたうえに、1467年の応仁の乱によって、室町幕府は事実上崩壊してしまいました。

家康はこうした室町幕府の失敗から二つのことを学びました。それは「大名の権力と財力との分散」と「独裁者を出さないシステム」です。

関ヶ原の戦いの後に西軍に所属した大名の領地を没収し、豊臣家の領地も大幅に削ることに成功した家康は、自分に味方した大名を中心に気前よく領地を分け与えました。しかし、結果として広大

な領地を所有することになった大名には、幕府の政治に参加させませんでした。

江戸時代の大名は、徳川家の縁戚に当たる親藩、関ヶ原以前から徳川家の家臣であった譜代、関ヶ原以後に徳川家に従った外様に大きく分かれており、これらのうち、江戸幕府の政治の中心となって活躍した大名の多くは譜代でしたが、彼らの領地は原則として10万石前後でした。

つまり、政治に参加して権力を与えられた者には財力を与えず、逆に政治に参加できずに権力を与えられなかった者に対しては、財力として広大な領地を与えたのです。室町幕府の失敗の教訓を生かした「大名の権力と財力との分散」によって、家康は大名の統治に成功したのです。

ところで、家康は自身の持つカリスマ性によって、いわゆるトップダウン型の独裁政治が可能でしたが、自分の死後の江戸幕府には、それだけの資質を持つ将軍が常に誕生するとは限りません。だとすれば、政治のシステムをどのように調整すればよいのでしょうか。

我が国では、古来の憲法十七条における「和の精神」に象徴されるように、何事も多数の人間の話し合いで決めるという傾向があります。このため、多数決の論理がもてはやされる一方で、トップダウンの独裁政治を嫌うという風潮が見られました。

そこで、家康は将軍の下に数人の老中を置いて、彼らの合議制によって政治を動かすことができるシステムを作り上げました。こうしておけば、将軍は老中が決めたことを承認するだけで済み、将軍の資質に関係なく幕政がうまく機能するようになります。

また、この手法による政治が仮に失敗したとしても、その責任は決断した老中が持つことになり、将軍の名前には傷がつかないというメリットもありました。家康の没後に始められた「独裁者を出さないシステム」が定着したことで、幕政の安定化が図られることになったのです。

ところで、幕政の安定を願っていた家康は、さらに他の手も打っていました。その際に彼が参考にして、また利用したのが、天皇あるいは朝廷の権威だったのです。

天下を統一した家康が恐れたことは、朝廷と未来の倒幕勢力とが結びつくことでした。そこで家康は、大名に対する統制令である武家諸法度(ぶけしよはつど)と同じ1615年に、禁中並公家諸法度(きんちゆうならびにくげしよはつど)を発令して、「天皇は学問を第一に行う」と規定することで、天皇が政治にかかわることを間接的に否定しました。

また、皇室や摂関家などの公家と大名家との通婚を禁じて、倒幕勢力と皇室との結びつきを断つと同時に、徳川家自身は積極的に公家から正室である御台所(みだいどころ)を迎えることで、皇室と関係の深い徳川家に弓を引かせないようにしました。

さらに、御台所を通じて、徳川家と親密になった摂関家が就任する関白の地位を、天皇の男子である親王より上位とすることで、摂関家によって間接的に皇室をコントロールすることも試みました。

このようにして、家康は皇室に対して色々と細かく規定するのみならず、皇室や朝廷の権威をしつかりと利用し、また参考にしました。それは「征夷大將軍の地位」や「宮家(みやけ)制度」のことで

室町幕府が滅亡した後、信長は天下を統一する前に死亡し、秀吉は関白として公家の一員となることで世の中を支配しようとしたが、家康は武家の棟梁(とうりょう)として朝廷から征夷大將軍に任じられるという、鎌倉幕府や室町幕府と同じ手法で天下を統一しようと考えました。

しかし、征夷大將軍を目指すといっても、かつての源頼朝や足利尊氏がそうであったように、源氏の血を引いていなければ將軍になれないという不文律があったのですが、家康はこの規定をあっさりクリアしていました。そのカギを握ったのが「松平」から「徳川」への改姓です。

松平家はそもそも賀茂氏(かもし)の出身とされていましたが、源氏の血を引く新田氏(にったし)の末裔(まっえい)である得川氏(とくがわし)が松平家に婿養子として入ったのがルーツであると朝廷に認められ、得川を「徳川」と名乗ることで改姓できました。

手法自体は強引であったものの、朝廷によって「源氏の末裔」であることが公的に認められた家康は、関ヶ原の戦いの後に征夷大將軍に就任することに成功して、江戸幕府の開設に大きく前進することになりました。

しかし、せっかく創設された徳川家も、子孫が絶えてしまっただけで元も子もありません。思案した家康が目にしたのは、1000年をはるかに超える長い年月のあいだ、ずっと血統を保ち続けている皇室に隠された、宮家というシステムでした。

同じ血統を長いあいだ保ち続けておられる皇室といえども、直系の血統が生き続けているわけではありません。時には直系の血が途絶えることがあり、その際には同じ血を引く傍系(ぼうけい)の子孫から新たな天皇が選ばれているのですが、それを可能としているのが、宮家と呼ばれるお家柄なのです。現代においても、秋篠宮家(あきののみやけ)の悠仁(ひさひと)親王殿下が、将来の天皇后継の候補者となられています。

このシステムに着目した家康は、2代將軍の徳川秀忠(とくがわひでただ)の血統とは別に、晩年になってつくった3人の男子をそれぞれ大名として、將軍本家にもしものことがあった場合の「血のセーフティーネット」としました。これが後に尾張・紀州・水戸の御三家となり、家康が死んでから約100年後に將軍本家の血が絶えた際に、紀州家から徳川吉宗(とくがわよしむね)が8代將軍に迎えられています。

この他、家康は宗教勢力の弱体化にも力を入れました。例えば、一向一揆を繰り返すなど屈指の武闘派であった浄土真宗の本拠地である本願寺を東西に分け、お互いが争うことで幕府に逆らわないようにするという分割統治に成功しました。

また、家康の死後には寺請(てらうけ)制度を採用して、国家権力が寺院に権益を与えることで逆に統

制し、宗教が政治に関わる必要をなくしてしまいました。本願寺の分断や制度は現代においても続いており、家康や江戸幕府による行政手腕がいかに高かったのかを間接的に証明しています。

このような、家康による徹底した政策によって、江戸幕府が約 260 年もの長きにわたって存続したことで、我が国に平和がもたらされ、その結果として、最初に述べたとおり人口や耕地面積が飛躍的に増加したことは疑いようのない事実です。私たちは家康が行った様々な努力をどう評価すべきなのでしょう。

4. 「平和主義者」家康に対する誤解と偏見

家康の行為の本質は、あくまでも「徳川家の繁栄のため」でした。しかし、それが主な目的であったにせよ、二度と戦国の世に戻ることがないように、家康がありとあらゆる手段を用いて、我が国を平和に導こうと考えていたこともまた事実なのです。

だとすれば、家康は平和の実現のために力を尽くしたことになりますから、そんな彼に対して最もふさわしい言葉は「家康は究極の平和主義者だった」ではないでしょうか。

とはいえ、豊臣家に対する陰湿な滅ぼし方や、大名に対する巧妙な統治、天皇に政治をさせないために手の込んだ対策を講じる一方で、皇室の権威やシステムをちゃっかりと利用するという浅ましき、さらには宗教勢力への対応など、家康の政策には「ずる賢い」「汚い」という言葉がよく似合うことで、我が国に平和をもたらした、というイメージとはかけ離れた印象があります。

実は、この矛盾こそが、私たち日本人が知らず知らずのうちに抱えている、平和に対する大いなる「誤解」なのです。

私たち日本人は、平和というのは尊いものであると同時に、「至誠(しせい、きわめて誠実なことやその思い)は天に通じる」とばかりに、平和であることを願い続ければ、自然と達成されるというイメージを多かれ少なかれ持っています。その最たるものが日本国憲法第 9 条における平和主義でしょう。

平和主義の理念そのものに対して反論するつもりはありませんが、一方的にひたすら平和を念じるだけで、本当に世の中に幸福が訪れるのでしょうか。もし家康が生きていれば、彼はきっとこう言うことでしょう。

「冗談じゃない。松平家が滅亡を避けて今川家に従った際に、俺たちがどんな目にあったのか忘れたのか」。

先述のとおり、今川家の圧力に屈して松平家が全面降伏し、幼い頃の竹千代が人質になった際、松平家の家臣は食うや食わずの生活を強いられたうえに、いざ戦となれば常に最前線に立たされて、死と隣り合わせを余儀なくされるなど、およそ同じ人間とは思えない、奴隷のような扱いを受け続けました。

そんな苦勞を経験したからこそ、家康は二度と同じ目に合わないために、非情な手段を用いてまでして、徳川家の平和のために尽力しました。

平和というものは、汚い手段であろうが何であろうが、あらゆる手練手管(てれんてくだ、人をだましてあやつる方法のこと)を用いることで初めて達成できる。これこそが平和の実現に隠された真実であり、家康の姿勢がそれを如実に示しています。要するに「平和は綺麗事だけでは達成できない」のです。

それなのに、私たちは家康のやり方を「汚い」として認めようとしません。なぜなら、平和への誤解のほかに、家康に対する偏見に満ちた先入観が、私たちの目を曇らせているからです。

感情の動物である以上、人間にはどうしても好き嫌いが生まれてしまいますが、特定の人間に対して悪い感情を持った場合には、その人物がどれだけ世間に認められていようが、決して良い評価をしようとはしません。

この感情は歴史上の人物においても同様であり、家康に関しては、多くの日本人、特に大阪の人間の多数が、はじめから「嫌いな人物」という先入観を持っているために、家康の功績を認めようとならないのです。

こうした悪(あ)しき先入観は、歴史教育においても幅を利かせており、特に近現代史の我が国に係る人物のほとんどが「我が国が一方的に他国を侵略した」という前提で紹介される傾向にあります。

個人が特定の人物に対してどのようなイメージを持とうが、その人の自由ではありますが、歴史教育に携(たずさ)わる人間が、特定の先入観で歴史を一方的に語ることは、どんなことがあっても絶対に許されません。

例えば、私は家康という人間が個人的に大嫌い、というより憎悪の対象になっているといっても過言ではないですが、そのような感情や先入観を一切排して、公平かつ冷静な目で今回の講座を続けているつもりです。

もし私が「家康嫌い」の感情そのまま彼らの功績の一切を否定し、ただ彼を悪しざまにののしるだけの講座を行っていたら、皆さんにここまでお付き合いいただけることはあり得ないでしょう。

歴史教育というものは、個人の感情や先入観を度外視して、公平な立場から行うべきものです。それなのに、教え手の一方的な価値観から、真実を歪めて歴史をねじ曲げる行為は、教わる立場の人々の「正しい歴史教育を受ける」機会を奪うことにもなりかねず、私には絶対に納得できません。

私は今後も、生まれ育った祖国の立場を踏まえながらも、可能な限り公平な目で「分かりやすく楽しい歴史教育」を目指し、個人の感情や一方的な先入観で、皆さんに歴史を語ることをしないことを誓いながら、今回の講座を終えたいと思います。(完)

主要参考文献：「逆説の日本史 12 近世暁光編」（著者：井沢元彦 出版：小学館）
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379682>

YouTube 再生リスト「徳川家康」
<https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML7bAPmfnuXEo77UnU4aoY5L>

黒田裕樹の歴史講座
<http://rocky96.blog10.fc2.com/>